

研究論文

絵本を介した親子のコミュニケーションの発達

吉 田 佐治子

The Development of Parent-Child Communication through Picture-Books

Sachiko YOSHIDA

【要 約】

絵本の読み聞かせ場面における親子のやりとりを長期にわたり追跡し、横断的・縦断的に検討したものを概括した。追跡調査は継続中であるが、0歳から4歳までの経過からは、各親子で独自の読み聞かせスタイルがあること、そのスタイルは、こどもが発達しても大きくは変わらないことが示された。

はじめに

絵本の読み聞かせは、現代の日本では、幼稚園や保育所、家庭などで広く、日常的に行われている。書店には、様々な種類の絵本がおかれ、また、保護者等が絵本を選ぶ際の参考となるようなブックリストの類も多い。自治体によっては、ブックスタート事業を通じて、こどもと絵本との出会いについて、保護者等に情報を提供しているところもある。

こどもに絵本を読み聞かせることについては、様々な観点から、その重要性が指摘されてきている。また、幼いうちから絵本を読み聞かせることによって、成長したあとも読書好きになる、学力にも好影響を及ぼす、ということも広く信じられているようである。日本におけるブックスタート事業が、発祥の地イギリスとは異なり、育児支援の一環であるということからは、絵本を通じて親子のコミュニケーションを図ることがその目的の1つだと考えられているのであろう。

このように、幼い頃からこどもに絵本を読み聞かせることは大切なことであり、ごく当たり前の光景としてとらえられているようである。しかしながら、その効果について、長期にわたり、実証的に検討した研究は多くはない。

筆者らは、何組かの親子について、2006年から継続して調査を行っている（「平成17～21年度社会連携「研究連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究（研究代表者：松島鈞）」第2プロジェクト「絵本を介した親子の相互作用に関する縦断的研究」。平成22年度以降も継続中）。この調査の目的は、以下の通りである。

- (1) 乳児期から就学期に至るまでの親子での絵本の読み聞かせ場面を分析することにより、
①絵本を介した親子の相互作用の発達的变化、②子どもの絵本への態度の発達的变化、③絵本を介した親子のコミュニケーションスタイルと子どもの言語発達との関係を明らかにする。選択する絵本は様々な種類のものを用意し、絵本のタイプによって親子間の相互作用に差があるかも検討する。
- (2) 同時期の家庭における絵本の読み聞かせ状況を分析することにより、この時期の親の役割、すなわち、物理的環境設定の役割、準備者としての役割、こどもが本を理解できるよう読書の熟達化を援助する役割、よりよい読み方を行うような評価者の役割について明らかにする。また、こどもが絵本に対してどのような態度を育てていっているのか、その過程を検討する。
- (3) 質問紙調査、聞き取り調査を行い、親の育児ストレスや絵本の読み聞かせに対する親の意識の側面について明らかにする。
- (4) 就学後、広く学業に関する調査を行い、長期にわたる絵本の読み聞かせに対する家庭の特別な関心が、子どもの生活や学力にどのような影響を与えるのか、そしてそれが、時期によってどのように変化していくのかを明らかにする。

その成果のいくつかは、学会等で報告しているが、本稿ではそれらを概括し、絵本を介した親子のコミュニケーションの発達について考察する。

研究概要

【研究協力家庭】 M市保健センターでのポリオ接種時に、来所していた家庭にアンケート調査を依頼した。その際、アンケートに回答し、研究への協力を承諾した 15 家庭（男児 7 名、女児 8 名；研究開始時平均月齢 9 ヶ月）を研究協力家庭とした。こどもはいずれも第一子である。また、調査開始時点において、家庭内での読み聞かせ状況は、子と一緒に絵本を見たことがある程度であり、家庭の絵本所有量は 5 冊以下であった。なお、この 15 家庭は、当初家庭の希望により、A グループ（「絵本と子育ての会」（後述）へ毎月参加する 5 家庭）と B グループ（同会への参加は 3 ヶ月に 1 度の 10 家庭）に分けられたが、2010 年 4 月からは、毎月参加してもらうこととした。また、途中転居等による不参加、それを補うために新たに協力家庭を求めたこともある。

以下、主に A グループのことにについて述べることとする。

【調査内容】 本研究における調査は、大きく 2 つの内容から構成された。すなわち、①「絵本と子育ての会」参加の際に、別室で研究者が指定する絵本 1 冊を親が子に読み聞かせる場面を V T R で撮影する。撮影は、固定カメラ 1 台で親子の正面から行った。また、絵本の読み聞かせの際は、親子はソファに座るようにした。②各家庭における自由な絵本の読み聞かせの様子、絵本との関わりについて、親に絵本ダイアリー（グランママ社）に記入してもらう。この絵本ダイアリーは、初回調査時（2006 年 3 月）に配付した。

また、定期的にアンケート調査を行い、親の育児ストレスや絵本の読み聞かせに対する親の意識の側面について明らかにしている。このアンケート調査は、研究協力家庭、研究協力家庭と同年齢のこどもをもつ家庭を対象とする。

なお、本稿では、これらのうち、指定された絵本を親が子に読み聞かせる場面の分析についてのみ報告する。

【絵本と子育ての会】 毎月 1 回、S 大学生涯学習地域貢献センター（以下センター）で開催している。この会のスタッフは、広い意味での「読み」を研究対象としている者 2 名と幼稚園勤務経験者 2 名との 4 名であり、4 名とも保育者養成課程での教歴がある。また、時には保育を勉強している学生が参加することもある。

センターに集まった親子は、1 時間から 1 時間半の間、自由に遊ぶ。終盤、スタッフによる集団での絵本の読み聞かせや集団遊びなどを行う。集団での読み聞かせに使用した絵本は、各家庭に持ち帰ってもらうことにしている。上記の V T R 撮影は、この自由遊びの時間に個別に行われる。また、自由遊びの時間には、親同士、あるいは親とスタッフとの情報交換、スタッフによる親や子への聞き取りも行われている。

参加する親は母親が多いが、父親が参加する家庭や、父母ともに参加する家庭もある。なお、父親が参加する家庭はほぼ固まっている。

指定された絵本の読み聞かせ

【絵本の選択】 VTR撮影する絵本の読み聞かせに用いる絵本は、こどもの年齢・発達をもとに選択している。また、「ストーリーのある絵本」だけではなく、「サブストーリーのある絵本」を用いたり、同じ絵本を時期をおいて指定したりすることもある。

【絵本の読み聞かせスタイル】

藪中ら（2008a）、藪中ら（2009a）、藪中ら（2010a）は、同じ絵本を読み聞かせる際の親子のやりとりに、各組ごとに特徴がみられることを示した。

藪中ら（2008a）は、親子それぞれの行動を、位置関係、身体接触（T）、行動（1：言語行動、2：絵本をみる、3：周りをみる、4：母（子）をみる、5：絵本をめくる、6：絵本をなめる、7：絵本を持つ、8：絵本に触る、9：指差し、10：絵本と同じ振りをする、11：絵本と同じ振りをさせる（母→子）、12：（子）移動、（母）子の移動を阻止する）から分析し、親子の行動の対応をみたものである（表1）。撮影時期は2006年4月であり、表1-1のKT児（男児）の月齢は11ヶ月、表1-2のNM児（女児）は9ヶ月であった。読み聞かせに使用した絵本は、『ばいばい』（まっぴのりこ作・絵、偕成社）である。

表1-1 母子の行動対応(KT組)

(回)

	こどもの行動												母親の行動												
	T	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	T	1	2	3	4	5	7	8	9	10	11	12	
こ ど も の 行 動	1																								
	2							1	4				3	6	4		4		8						
	3	3						1				2	2	3	12		3	12		14				2	4
	4																								
	5																								
	6																								
	7																								
	8																								
	9																								
	10																								
	12														1		1	4		5					
	合計	3			8	15			1	1	4		2	7	6	19	4	4	21		28				2

表1-2 母子の行動対応(NM組)

(回)

	こどもの行動												母親の行動												
	T	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	T	1	2	3	4	5	7	8	9	10	11	12	
こ ど も の 行 動	1																								
	2	1									1		5	16	17		2	2	17		6			1	
	3										1		4	12	8		4	1	11		2			1	
	4																								
	5																								
	6																								
	7																								
	8																								
	9																								
	10																								
	12																								
	合計	1			19	12						2		9	28	25		6	3	28		8			2

表1に示した2組では、まずこどもの行動に差がある。月齢の違いもあるだろうが、KT児は様々な行動をとるが、NM児の行動は限られている。KT児は観察開始時には母の膝の上にはいたが、やがて対面して座り、次に前後に座り、終盤は母子が離れている状態になった。一方NM児は、観察開始から終了まで、母の膝の上に座っていた。このような子の違いを反映してか、子の行動に対して親がどのように応えるのかは、親子の組によって違いがある。例えば、子の注意が絵本からそれ、周りを見ているとき、KT母は子を見ることが多いのに対し、NM母は子を見るときともに絵本を指さしたりもする。

藪中ら（2009a）は、言語的なやりとりが出てきた頃の親子のやりとりについて分析している。また、絵本の違いによる行動の違いも分析している。

ここで使用した絵本は、1歳2ヶ月頃に『もうおきるかな』（まつのまさこ文、やぶうちまさゆき絵、福音館書店）、1歳3ヶ月頃に『こぐまちゃんとぼーる』（もりひさし・わだよしおみ作、わかやまけん絵、こぐま社）である。『もうおきるかな』は、「ねこねこよくねているね、もうおきるかな？ あーおきた！」という文章の繰り返しで、うさぎ、ねこ、いぬ等の動物が登場するものである。『こぐまちゃんとぼーる』は、こぐまちゃんがボールで遊んでいるうちに、ボールがどこかへいってしまい、「ここにもない、ないよないよ」と探していると、牛乳屋さんが見つけてくれるというストーリーである。この2冊の絵本の読み聞かせの際の親子のやりとりの例を、表2に示す。

表2 2組の親子のやりとり

	もうおきるかな		こぐまちゃんとぼーる	
	母親	こども	母親	こども
OS組	子どもが命名して指差すと「うん、ねこ」「Sもねんね」と必ず何らかのことは返している。また、時々「あっ、それ何？」「これは？」「ねんねどうするの」と質問する。	ねこの絵を指差し「ねこ」、ねこが寝ている絵を指差して「ねんね」と発話。「ねんね、どうするの」と母親の質問に絵本と同じふりをする。	子どもが命名して指差すと「うん、ボール」と必ず何らかのことは同時に対象を指差して応答する。	ボールの絵を指差して「ぼーる」、ボールが転がる方向を「こっち」と指差し発話。
NM組	絵を指しながら絵本に忠実に読む。子どもが指差した対象に「かわいいね」「あそんでいるね」と説明を加えながら読む。	絵を指差すが、発話はなし。読み終わったあと、自分で頁をめくっていく。	子どもの名前を入れて読む。子の顔を見たり、絵を指差したりしながら読む。子どもの注意が中断すると、絵本の質問に「んーんー」と言いながら絵指差し、絵本に注意を集中させる。	よそ見をしながらも、絵に視線を向けている。母親の「ボールはどこ？」の質問に「んーんー」と言いながら絵指差す。

OS組は、絵本による親子の行動の違いはほとんどみられない。子をはじめから絵本に興味をもっており、絵本から注意がそれることはほとんどなく、絵本を指差しての発話などがみられる。母親は子どもの反応を見ながら絵本の世界を共有し、一緒に楽しんでいる様子が見える。NM組を含めた4組は、ストーリーのある絵本（『こぐまちゃんとぼーる』）で子の注意が絵本から離れることが『もうおきるかな』よりも多い。このような時、母親は「みて！ほらほら！あっ！」などと対象を指差し、子の注意を絵本に集中させようとしている。また、絵本に出てくる動物やものを命名しながら伝達したり、子に質問をして働きかけたりするために指差しが使用されている。

藪中ら（2010a）では、3歳になった子に、文字のない絵本を読み聞かせる際の親子のやりとりを分析している。

撮影時期は、2008年11月～12月であり、使用した絵本は、『りんごとちょう』（イエラ・マリ エンゾ・マリ作、ほるぷ出版）である。この絵本は、表紙にタイトルがある以外は文字がなく、親は、絵のみから物語を作り、子に語ることになる。この時の親子の発話を文単位で区切り、全発話を分析対象とした。分類カテゴリーは①命名、②質問、③応答、④説明、⑤復唱、⑥聞きなおし、⑦承認、⑧提示、⑨先取り、⑩確認、⑪絵の読み取り、⑫賞賛、⑬絵からの連想、⑭注意喚起、⑮児の名前、⑯状況、⑰感情表出、⑱開始・終了、⑲その他（発声等）である。また、親のオノマトペ、間投助詞・終助詞（ね・さ・よ）の使用数も数えた。分類結果を表3に示す。

表3 親子の発話内容

	OS組	OM組	OR組	SS組	IA組	AH組	IZ組	KT組	KT組
	児 母	児 母	児 母	児 母	児 母	児 母	児 母	児 母	児 父
①命名		1 5	1	4	1	7			1 1
②質問	3	6	9	1	1 9	9 12	4	2	9
③応答	4	1	8	2	8	10 1	2	6	6 2
④説明	1 14	16	1 20	2 20	1 26	7 26	9	1 16	2 16
⑤復唱			2	1		3			
⑥聞きなおし	1	1	1	2	3	6	3		1
⑦承認			1		1	1	1		
⑧提示									
⑨先取り	6								
⑩確認	4	2	4	1	4	8	2	2	4
⑪絵の読み取り									
⑫賞賛			1			1			
⑬絵からの連想				1	1	2 1	1		
⑭注意喚起		2			2	2 11	1	3	7
⑮児の名前						1	2		6
⑯状況	1								2 1
⑰感情表出		3	1	6	3	2 7	1	1	4
⑱開始・終了	1	1	1		1	1	1	1	1
⑲その他（発声等）									
タイトル	1	1	2	1	1	3	1	1	1
合計発話数	9 27	3 36	12 40	9 32	11 51	39 82	6 22	7 26	13 51
オノマトペ	1	3	4	4	13	4	1	1	1
助詞	3	8	4	8	23	11	5	6	17

文字がないという絵本の特性によるものか、親の発話は④説明が多かった。その際、オノマトペや間投助詞・終助詞を多用する人とそうではない人とに分かれた。また、親の②質問は「これは何？」の類が目立つ。⑰感情表出も比較的多く、親自身が楽しみながら読み進めている様子うかがえる。子の発話数は全体的に少なめであり、その多くは親からの質問に答えるものである。

親子のやりとりについて、親主導の組と子ども主導の組とがみられた。それぞれの一例を表4に示す。同じ頁でのやりとりである。OR組は、親は「これは何？」型の質問が多く、子はそれに答えるのみであり、その答を親は修正している。また、親はあまり助詞を使わない。一方のAH組は、子の発話が多く、親はそれを誘導するような言動をしており、助詞を多用している。子の質問、特に「なぜ？」が多い。このように、文字のない絵本においては、その親子の絵本の読み聞かせのスタイルが前面に出てきやすいようである。

表4-1 親主導型の例(OR組)

児の発声	児の様子	母の発声	母の様子
虫		見て、ほら、見て、ここ。 これ誰だっけ？	絵本を児の方へ差し出しながら、絵を指さす。
みみず		虫さんの卵 …これ誰だっけ？ 幼虫 幼虫さんが生まれて出てきました。	ページをめくる。

表4-2 子ども主導型の例(AH組)

児の発声	児の様子	母の発声	母の様子
りんご		あ、りんごとちよう	
は一ちゃんのだいすきなりんご。	おもちゃから手を離す。	ねえ、おいそーう。 は一ちゃんすきだね。	児の顔を見る。 ページをめくる。
りんごのたね。	絵本の絵を指さす。	半分に切ったね。 あ、何これ？	絵本の絵を指さしながら、絵本に顔をよせる。
虫	母と一緒に絵本に顔をよせる。	虫さんが出てきたね。	
なんで虫さんが出てきたんだろう。			

〔絵本の読み聞かせスタイルの変化〕

上でみたように、絵本を読み聞かせる際の親子のやりとりを横断的にみると、親子によってそのスタイルに違いがあることがわかる。では、こうした読み聞かせスタイルは、子の発達に伴って変化していくのだろうか？

藪中ら（2008b）、藪中ら（2009b）、藪中ら（2010b）は、絵本を読み聞かせる際の親子のやりとりの継時的な変化をおっている。

藪中ら（2008b）で使用した絵本は、『ばいばい』（まついのりこ作・絵、偕成社）と『くだもの』（平山和子作、福音館）であり、撮影時期は、『ばいばい』が2006年3月（第1回）、『くだもの』が2006年11月（第9回）である。親子の行動を、藪中ら（2008a）と同じカテゴリで分類し、その変化をみている。ある親子の例を表5に示す。

表5-1 母子の行動対応（OS組）第1回

（回）

	こどもの行動												母親の行動											
	T	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	T	1	2	3	4	5	7	8	9	10	11	12
こ ど も の 行 動	1																							
	2						2		4	3					14	7		7		13			2	
	3						2		1	1		1			7	3		4		6			2	
	4																							
	5																							
	6																							
	7																							
	8																							
	9																							
	10																							
	12																							
	合計						4		5	4		1			21	10		11		19			4	

表5-2 母子の行動対応（OS組）第9回

（回）

	こどもの行動												母親の行動												
	T	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	T	1	2	3	4	5	7	8	9	10	11	12	
こ ど も の 行 動	1			3											3	2		1	1	3		2			
	2	3								1	2		1		15	11		3	2	16		6			
	3	2							1				1		7	5	1	2	1	7		1			
	4	1													1			1		1					
	5																								
	6																								
	7																								
	8																								
	9																								
	10																								
	12															12	2		11	1	12		1		1
	合計														38	20		18	5	37		10			1

表5に示したOS組は、子の行動とともに親の行動も変化している。はじめ子は、絵本に興味を持たないのか絵本以外のことに関心を示しており、母は、その子の移動を阻止しようとしていたが、徐々に見守るようになる。子は、次第に絵本を見るが増えるようになるが、それに伴い母も絵本を見るようになってきている。子をよく見ており、発話も多い。

また、藪中ら（2009b）では、1歳9ヶ月頃、2歳1ヶ月頃、2歳9ヶ月頃の、絵本の読み聞かせ時の言語的なやりとりを比較し、例えば、話題の選択には各親子による独自の傾向があ

ること、親子のやりとりがパターン化しつつあることを見いだしている。

藪中ら（2010b）では、藪中ら（2010a）と同じく文字のない絵本（『りんごとちょう』）を用い、それを繰り返して読んだ時の親子のやりとりの変化をみている。

子の発達に伴い、発話の分類に新たなカテゴリー（促し、橋渡し、感想、メタ感想、訂正・修正、注意の誘い、独り言、叙述）を追加し、3歳時期との比較を試みている。4歳時期の親子の発話内容を表6に、3歳時期との比較を表7に示す。

表6 母子の発話内容

カテゴリー	SS組		TM組		NM組		KT組		KO組		OR組	
	女兒		女兒		女兒		男児		男児		男児	
	児	母	児	母	児	母	児	母	児	母	児	母
1. 命名	8		3		1	2	4				6	
2. 質問		16		8	1	4		4	2	12		3
3. 応答	11	1	9	1			6		5	2	3	
4. 説明	3	1	3	6		2	5		1		1	
5. 復唱		5		1		3		4		5	1	7
6. 聞きなおし		2		1				1				
7. 承認		4		11		1		4				1
8. 提示												
9. 先取り												
10. 確認		2		3				3	3	3		1
11. 絵の読み取り												
12. 賞賛												
13. 絵からの連想												
14. 注意喚起						2						
15. 児の名前						5						
16. 状況		1		1		8	1	2				1
17. 感情表出	2	9	4	1	1		6	5	9	8	2	1
18. 開始・終了		1		1			1		1			1
19. その他（発声等）				1								
20. 促し				1								1
21. 橋渡し				1		5	2	2	3	2		
22. 感想	2	3		1		1						
23. メタ感想	2	1	1	3		1			1			
24. 訂正・修正			1	1					1			5
25. 注意の誘い		1	3	2		1		8		2	1	
26. 独り言			1	1		2		1				1
27. 叙述	1	25	14	18	1	17	3	18	2	11	9	12
タイトル	1	1		1		2			1	1		3
合計発話数	30	77	38	66	4	56	26	52	25	46	23	37
オノマトペ		3		4		5	1			2	1	
助詞	2	11		29		9	2	13	1	3	1	10
読み聞かせの時間	4:38		3:32		3:35		2:29		2:25		2:37	

表7 母子の発話内容(3歳時期との比較)

カテゴリー	SS組				OR組				KT組			
	3歳		4歳		3歳		4歳		3歳		4歳	
	児	母	児	母	児	母	児	母	児	母	児	母
1.命名	4		8		2		6				4	
2.質問		2		16		9		3		2		4
3.応答	4	1	11	1	8		3		6		6	
4.説明	2	2	3	1			1			1	5	
5.復唱		1		5	2		1	7				4
6.聞きなおし		3		2		1				1		1
7.承認				4		2		1				4
8.提示												
9.先取り												
10.確認		1		2				1				3
11.絵の読み取り												
12.賞賛						1						
13.絵からの連想												
14.注意喚起												
15.児の名前												
16.状況				1				1			1	2
17.感情表出		3	2	9			2	1			6	5
18.開始・終了				1		1		1		1	1	
19.その他(発声等)												
20.促し								1				
21.橋渡し										1	2	2
22.感想			2	3								
23.メタ感想			2	1								
24.訂正・修正		1				4		5				
25.注意の誘い				1		1	1			4		8
26.独り言						1		1				1
27.叙述		15	1	25	1	20	9	12	1	19	3	18
タイトル		1	1	1		2		3		1		
合計発話数	10	30	30	77	13	42	23	37	7	30	26	52
オノマトペ		4		3		4	1			1	1	
助詞		8	2	11		4	1	10		6	2	13
読み聞かせの時間		2:43		4:38		2:53		2:37		2:37		2:29

表6にみられるとおり、親の発話は、「27.叙述(絵本の内容の発話)」が多い。その際、オノマトペや間投助詞・終助詞を多用する母とあまり使用しない母に分かれる。また、「2.質問(これは何?)」の類を多用する母とあまり使用しない母がいる。子の発話は、母の質問への「3.応答」や「1.命名」「17.感情表出」が比較的多いことから、文字のない絵本を子自身が楽しんでいる様子がうかがえる。親子のやりとりは、母親主導型と母子交代型がみられる。母親主導型

は、対話の主導権を母が握り、叙述をしながら質問を繰り返し、子から反応を引き出そうとしている。特に、OR組の母は、子の発話に応答しなかったり、修正したりすることが多く、母のフォーマットに子を組み込もうとする態度が強く、感情の共有場面があまりみられない。母子交代型は、子の発話が多く、母は子に叙述をしながら説明や質問を繰り返し、子はそれに積極的に応答している。特にSS組は、母の承認がさらなる子の発話を促し、絵本を媒介とした感情の共有場面が多くみられる。4歳時期では、母は能動的に子が参加する足場づくりを行い、子の積極的発話を導こうとしていることが明らかとなった。表7では、3組の親子について3歳時期と比較しているが、児から情報を提出させる「21.橋渡し」が4歳時期の母の発話にみられる。4歳時期の子の発話数はほとんどが3歳より多い。3歳頃から、母は子から情報を提供させるための方略を多種使用することが明らかとなった。一方で、各組における母親主導、母子交代といった読み聞かせのスタイルは、3歳時期と4歳時期とでは大きく変わっていない。OR組の母は、両時期とも母親主導で読み進め、子の発話に対する修正も多い。SS組では、子は4歳になるとより自由に発話し、母もそれによく応えている。このように文字のない絵本は、母子で個別に部分的に絵本を味わうという母子独自のスタイルが前面に出てくると考えられる。

おわりに

ここまで、指定された絵本の読み聞かせ場面における親子のやりとりについてみてきた。絵本の読み聞かせスタイルは、家庭ごとに異なり、それぞれ独自のパターンを作り上げているといえる。このスタイルは、子と親双方の行動が組み合わさったところでできあがっていくようであるが、ある程度できあがったパターンは、その後もあまり変化しないこともみてとれる。これから子は学齢期を迎える。読書も自立していく時期である。このような時期に、親子のやりとりがどのように変わっていくのか、興味深いところである。

絵本を親子のコミュニケーションの道具の一つとして考えるとき、絵本の読み聞かせ以外の場面での親子のコミュニケーションがどのようなものであるかも、併せて検討していく必要がある。『絵本と子育ての会』の自由遊びや集団遊びの時間の親子の様子を観察しているスタッフによれば、絵本の読み聞かせ場面と通ずるものがあるようである。例えば、母親主導型の例としてあげたOR組の母は、子が何らかのトラブルを起こしたり、制止する必要があったりする際には、子に対面し、冷静に理詰めで諭すことが多いようにみられる。親子のコミュニケーションは、こうした親の特性、子の特性があいまったところに成立するのであろう。

引用文献

- 藪中征代・村田光子・吉田佐治子 2008a 1冊の絵本をめぐる親子のやりとり(2)—0歳児の絵本を介した親子の非言語的やりとり— 日本発達心理学会第19回大会発表論文集
- 藪中征代・吉田佐治子・村田光子 2008b 絵本をめぐる親子のやりとりの継時的変化(1) 日本教育心理学会第50回総会発表論文集
- 藪中征代・吉田佐治子・村田光子 2009a 絵本をめぐる親子のやりとり(3)—1歳児の絵本の違いによる親子の行動の違い— 日本発達心理学会第20回大会発表論文集
- 藪中征代・吉田佐治子・村田光子 2009b 絵本をめぐる親子のやりとりの継時的変化(2) 日本教育心理学会第51回総会発表論文集
- 藪中征代・吉田佐治子・村田光子 2010a 絵本をめぐる親子のやりとり(4)—文字のない絵本の読み聞かせを通して— 日本発達心理学会第21回大会発表論文集
- 藪中征代・吉田佐治子・村田光子 2010b 絵本をめぐる親子のやりとりの継時的変化(3)—文字のない絵本の読み聞かせを通して— 日本教育心理学会第52回総会発表論文集